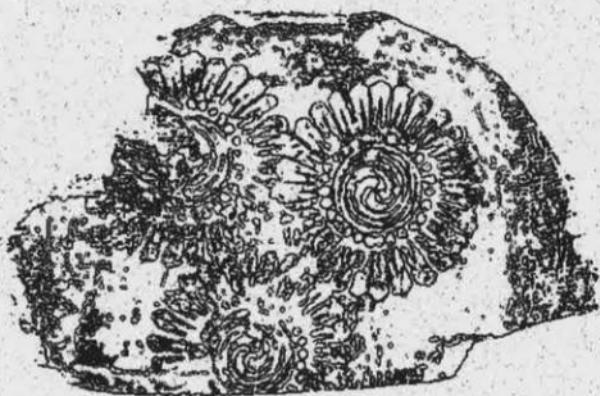


植附遺跡第11次発掘調査報告



2002年3月

財団法人 東大阪市文化財協会

表紙カットは SE102 出土漆桶内面

例言

- 1.本書は共同住宅建設に伴う植附遺跡第11次発掘調査の報告書である。
- 2.本調査は高林健一氏の委託を受けて財団法人東大阪市文化財協会が実施した。発掘調査に伴う工事は高林健一氏から発注され株式会社阪上建設が行った。
- 3.現地調査と整理は金村浩一を担当者とし、事務局体制等は次の通りである(2002年3月現在)。

理事長	日吉亘
常務理事	北山良(東大阪市教育委員会社会教育部参事)
事務局長	小島進
調査部長	同上(兼務)
庶務部長	同上(兼務)
庶務主任	上野節子
庶務部員	朝田直美 大林亨
調査補助	川口仁啓 永田明徳 宮本勇 重定礼子 武田慎平
- 4.調査における土色名は農林水産省農林水産技術会議事務局監修財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』に準じた。
- 5.遺構実測は建設省告示による国土座標第VI系を使用し、基準点の移設は株式会社サンヨーに委託した。水準高はT.P.値を用いた。
- 6.動物遺体の同定は財団法人東大阪市文化財協会調査員別所秀高による。
- 7.本書の編集と執筆は金村が行った。
- 8.本調査の経費はすべて高林健一氏のご負担によるものである。調査に御理解と御協力をいただき、深く謝意を表したい。
- 9.現地調査は株式会社阪上建設、安西工業株式会社他の諸氏による協力によって円滑に進行した。記して謝意を表したい。

目次

例言

目次

第1章	はじめに	2
第2章	層序の概略	4
第3章	江戸時代以降の遺構	8
第4章	鎌倉～室町時代の遺構と遺物	10
第5章	弥生時代の遺構と遺物	28
第6章	まとめ	31

注

報告書抄録

第1章 はじめに

植附遺跡は大阪府東大阪市西石切町にひろがる弥生時代から現代に至る複合遺跡である。遺跡は生駒山西麓の沖積扇状地の斜面(現地表面T.P.+5~20m)に位置する。

植附遺跡の南と南西には弥生時代の集落や平安~室町時代の集落が発見されている鬼虎川遺跡・西ノ辻遺跡が接し、東には現在では石切鏡箭神社となっている白鳳時代に創建されたと考えられる法通寺跡、北東には古墳時代の集落が発見されている辻子谷遺跡が、東南には绳文~室町時代の集落が発見されている神並遺跡が位置する。これらの遺跡は行政的な区分であり各時代の集落のひろがり等は遺跡範囲を越えていたと考えられる(図1.2)。

植附遺跡は1963(昭和37)年に小規模な発掘調査によって発見された。この調査ではピット3基等を検出し、弥生土器や瓦器・土錘等が出土した。これによって植附遺跡が弥生時代中期と鎌倉~室町時代の遺跡であることが判明した。なお、この調査は枚岡市立石切中学校(当時)生徒赤石満君によって1個の弥生土器が採集されたことが契機となっている(注1)。

その後、遺跡の南に接して1986(昭和61)年10月1日に近畿日本鉄道東大阪線が開通し新石切駅が設置される等、鉄道・道路が整備されるに従いビル建設等が遺跡範囲内で増加し、本格的な発掘調査が行われるようになった。現在では15次におよぶ発掘調査が実施されている(2001年12月現在)。それらの調査によって遺跡の南部では西ノ辻遺跡からひろがる弥生時代と鎌倉~室町時代の集落等が発見され、遺跡の中央部では古墳時代の住居跡等(注2)が、北西端部では弥生時代前期の集落や古墳時代の小型低古墳等(注3)が発見されている。

今回、高林健一氏によって東大阪市西石切町1丁目69-1・2において共同住宅の建設が計画された。計画地が植附遺跡の範囲内に位置するため1996(平成8)年6月3日に東大阪市教育委員会文化財課によって試掘調査が実施された。その結果、発掘調査の必要が指示され、関係機関の協議の結果、財団法人東大阪市文化財協会が発掘調査を実施することになった。

調査着手前の調査地はほぼ平坦で屋根付き駐車場として使用されていた。南は西ノ辻遺跡第10次発掘調査地である近畿日本鉄道東大阪線等が接し調査地よりも現地表面で約1.5mの段をなして低い(注4)。東は植附遺跡第1次発掘調査地であるビルが隣接し調査地よりも現地表面で約0.5mの段をなして高く(注5)、西には植附遺跡第2次発掘調査地であるビルが接し(注6)、現地表面で最大約4mの段をなして調査地よりも低くなっていた(図1.3)。

調査は試掘結果にもとづき、現地表面下約0.9mまでの盛土・現代耕土層を機械によって掘削し、以下を人力によって掘削しつつ遺構や遺物の検出作業等を行う計画であった。なお、調査は鋼矢板打設等の土留め工事を施さず素掘りで実施している。計画当初の調査面積は約329.5m²であったが、隣接建物から控えた等のため、最終的に調査面積は約306m²となった。(図1.4)。

調査の結果、弥生時代の落ち込みや土壙・鎌倉~室町時代の掘立柱建物や井戸・溝他を検出し、整理箱(外寸386mm×59mm×155mm)に19箱の土器類(復元した状態を含む)、1箱の木器類、1箱の骨類・サヌカイト片・種子等を得た。加工の施されていない木はサンプルを採取し投棄している。出土遺物には遺跡の略称、次数、登録番号を記している(例:UET11R001)。

今回の調査によって植附遺跡の様相を知る貴重な資料を得ることができた。次章以下に調査の結果を略述する。なお、調査期間は1996(平成8)年10月9日~1996(平成8)年11月28日である。

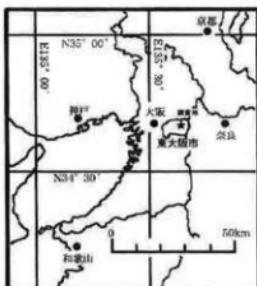


図1.1 東大阪市及び調査地位置図(S=1/200,000)

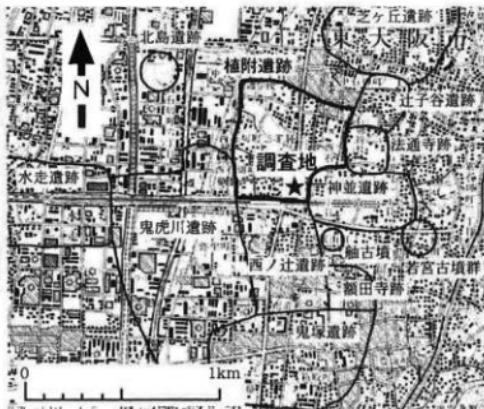


図1.2 調査地及び周辺遺跡位置図(S=1/25,000)

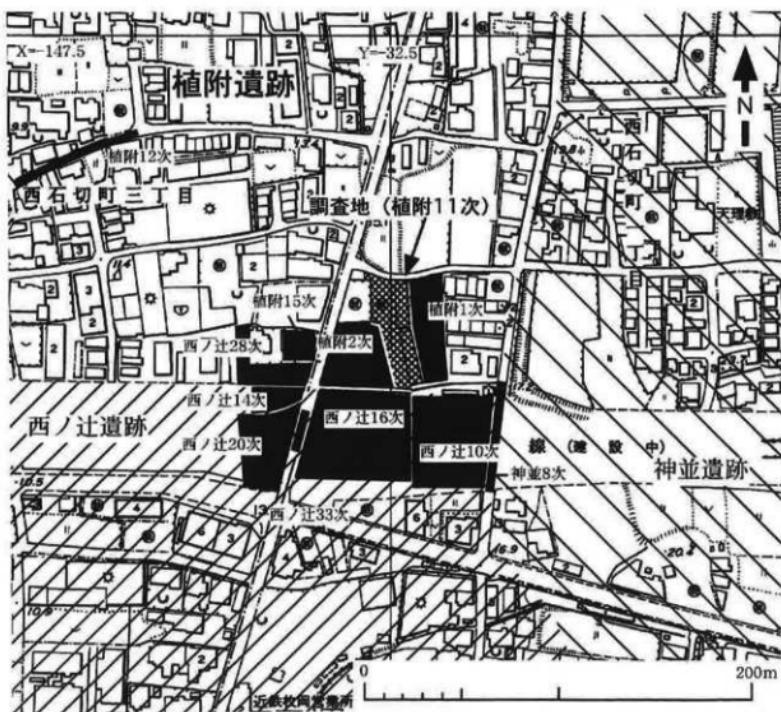


図1.3 調査地及び周辺主要調査位置図(S=1:2,500)

第2章 層序の概略



図1.4 調査区位置図 (S=1:400)



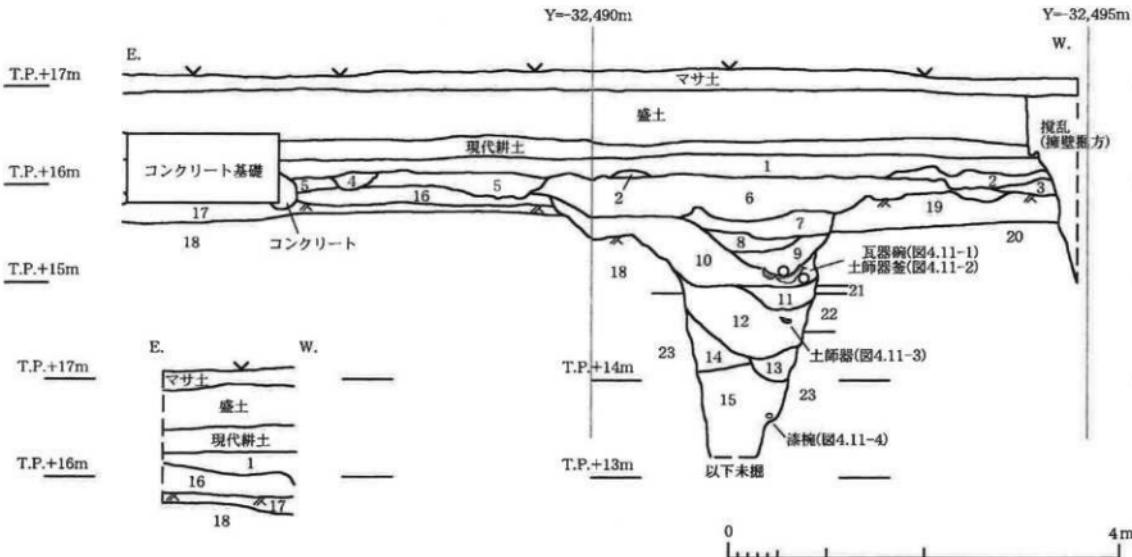
図2.1 調査区南壁中央部の土層(西北から)

盛土・現代耕土・擾乱層とそれらの下に位置する江戸時代～近代の耕土層(第I層)を機械によって除去すると調査区の南西部では主に褐色を呈する中粒砂混砂質シルト層(第II層)を、東南端では黒褐色中粒砂混砂質シルト層(第III層)を検出した。それ以外では黄～褐色を呈する砂礫～粘土層の地山となる(注7)。第II層は弥生土器や土師器・瓦器等を含み、上面で鎌倉～室町時代のピットが検出され、その下位でも鎌倉～室町時代の遺構が検出されたことから、鎌倉～室町時代に施された整地層と考えられる。第III層は少層の土師器や瓦器等を含み、第II層の下に位置する。ごく一部を検出したに過ぎず、詳細は不明であるが鎌倉～室町時代の集落が形成される時点での整地層と思われる。また、第II・III層と地山層の上面がほぼ平坦であり、それらの上に第I層が堆積していることから、江戸時代に調査区を耕作地に造成する際に第I層と地山層が削平されたと考えられる(図2.1～4)。

遺構の検出は第I層を除去した時点(第II・III層上面、地山上面)と地山上面で行った。しかし、地山上面で検出されたピットの一部に第II層上面で見逃していると思われるものがあるため、本報告では層位別に遺構を述べず、江戸時代以降と鎌倉～室町時代、弥生時代と時代ごとに遺構を分けて述べる。

遺構には戸戸=SE、溝=SD、土壙=SK、掘立柱建物=SB、樋=SA、ピット=SPの略称を付し、江戸時代以降の遺構には2桁の、鎌倉～室町時代の遺構には101番からの3桁の、弥生時代の遺構には201番からの3桁の番号を付している。

なお、今回の調査では布目を残す丸平瓦片や古墳時代の須恵器細片、平安時代の須恵器蓋や黒色土器A類碗等が出土しているが、少量であり特に項目を設けて述べない。



1 : 2.5YR4/1褐色中粒砂混砂質シルト(第I層)

2 : 2.5Y5/2暗灰黄色中粒砂混砂質シルト(SD03)

3 : 2層と6層のブロックの混合土(SD03)

4 : 10YR4/1褐色中粒砂混砂質シルト～シルト(搅乱?)

5 : 10YR4/1褐色中粒砂混砂質シルト(SK11)

6 : 10YR4/1褐色中粒砂混砂質シルト(第II層)

7 : 2.5Y8/6黄色粗砂～中粒砂(SE102上層)

8 : 2.5Y8/6黄色粘土(SE102上層)

9 : 2.5Y8/6黄色粘土混粗砂～中粒砂(SE102上層)

10 : 2.5Y3/2黑褐色中粒砂混砂質シルト(SE102中層)

11 : 10Y3/2オリーブ黒色中粒砂混砂質シルト

(10層が青く変色)(SE102中層)

12 : 5G2/1暗緑色中粒砂混結土(SE102中層)

13 : 10BG2/1青黒色粗砂～シルト(SE102下層)

14 : 15層と地山ブロックの混合土(SE103下層)

15 : 10BG2/1青黒色砂礫混シルト(SE103下層)

16 : 10YR3/2黑褐色中粒砂混砂質シルト(第III層)

17 : 10YR2/2黒褐色砂礫～粗砂(地山)

18 : 2.5Y8/8黄色粘土(地山)

19 : 10YR4/2灰黄褐色粘土混砂礫(地山)

20 : 10YR4/2灰黄褐色粗砂～中粒砂(地山)

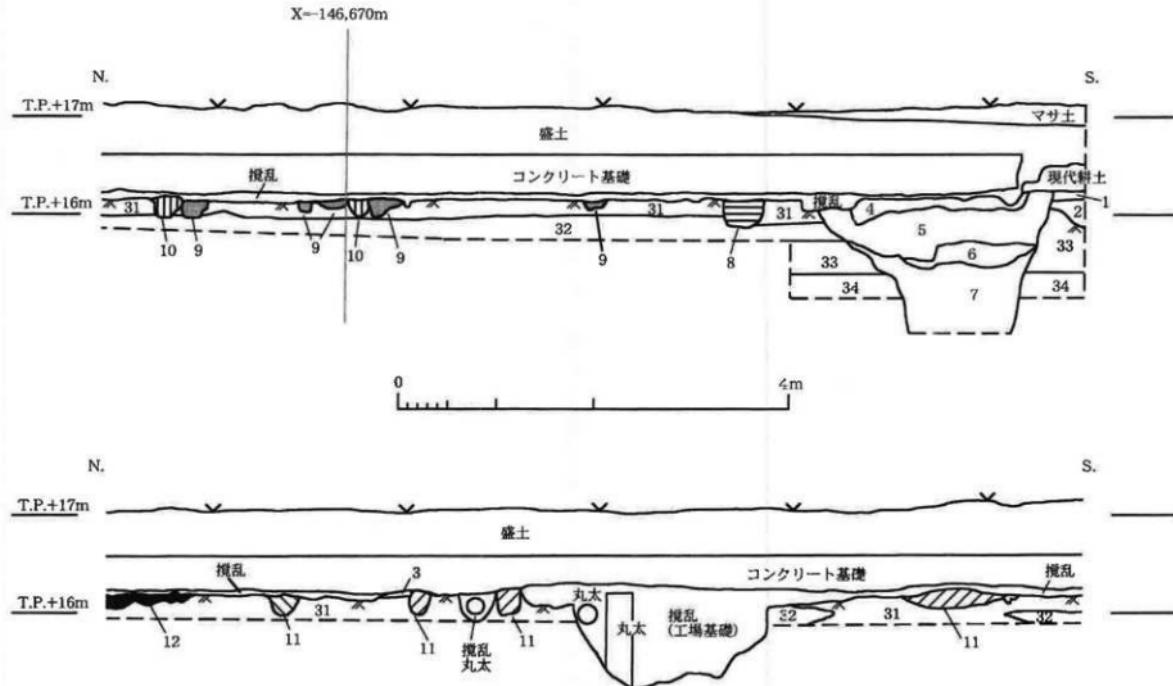
21 : 2.5Y5/8黄色細砂(地山)

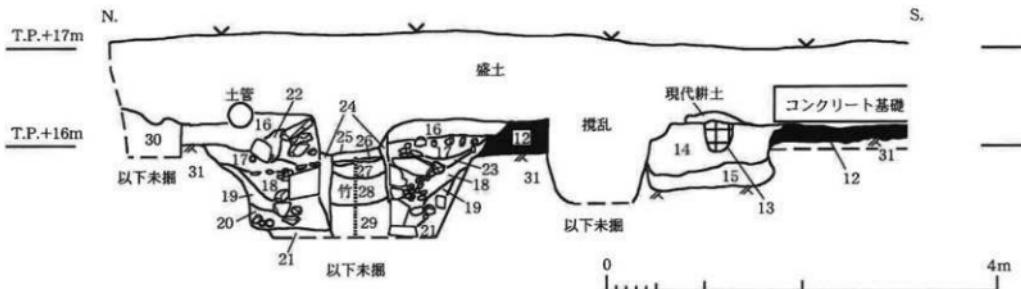
22 : 5G4/1暗緑灰色細砂

(水平方向の粘土のラミナが顯著)(地山)

23 : 10GY5/1緑灰色砂礫～粗砂(地山)

図2.3 調査区東壁土層図南半(S=1:50)





- 1:2.5YR4/1褐灰色中粒砂混砂質シルト(第I層)
 2:10YR3/2黒褐色中粒砂混砂質シルト(第II層)
 3:10YR4/2灰黃褐色中粒砂混粘質シルト(第II層?)
 4:10YR6/2灰黃褐色中粒砂混砂質シルト(鉄分沈着)(SE03)
 5:10YR5/1褐灰色中粒砂混砂質シルト(SE03)
 6:2.5Y5/1黄灰色中粒砂混砂質シルト(鉄分沈着)(SE03)
 7:3N4/灰色中粒砂混砂質シルト～シルト(もさもさ)(SE03)
 8:2.5Y3/2黒褐色中粒砂混砂質シルト(ピット)
 9:5Y4/2灰オリーブ色中粒砂混粘質シルト(ピット)
 10:2.5Y2/3にぶい黄色粘質シルト(ピット)
 11:5Y4/2灰オリーブ色中粒砂混砂質シルト(候混じり)(遺構)
 12:10YR3/2黒褐色中粒砂混粘質シルト(弥生落ち込み)
 13:2.5Y4/2暗黄褐色中粒砂混砂質シルト～砂質シルト(SB112柱穴?)
 14:10YR4/2黄灰褐色中粒砂混砂質シルト(SD104上層)
 15:2.5Y3/1黒褐色中粒砂混砂質シルト(SD104下層)
 16:10YR5/2にぶい黄褐色粘質シルト(SE02掘方)
 17:5Y3/2オリーブ灰色細砂(SE02掘方)
 18:5Y3/1オリーブ黑色粘土(SE02掘方)
 19:10YR8/8黄橙色粘土ブロック(地山)と中粒砂の混合土(SE02掘方)
 20:10YR8/8黄橙色粘土ブロック(地山)と5Y2/1黒色粘土ブロックの混合土
 (SE02掘方)
 21:5Y5/3灰オリーブ色粘質シルト(SE02掘方)
 22:2.5Y4/1黄灰色細砂混砂質シルト(SE02掘方)
 23:5Y3/1オリーブ黑色粘土(SE02掘方)
 24:2.5Y5/2暗黄褐色細砂～中粒砂(SE02柱内)
 25:2.5Y8/4淡黄色粘土(SE02柱内)
 26:7.5Y8/1灰白色細砂(SE02柱内)
 27:2.5Y8/4淡黄色粘土(SE02柱内)
 28:2.5Y4/1黄灰色砂質シルト(SE02柱内)
 29:10Y3/1オリーブ黑色粗砂～中粒砂(SE02柱内)
 30:10YR8/8黄橙色粘土ブロック(地山)と5Y4/1灰色細砂の混合土(土壤?)
 31:2.5Y5/3黄褐色～10YR8/8黄橙色中粒砂～粘土(地山)
 32:7.5Y4/1褐灰色中粒砂～細砂(地山)
 33:10YR5/2黄灰褐色細砂～粘質シルト(地山)
 34:10YR5/1褐灰色粗砂～中粒砂(地山)

第3章 江戸時代以降の遺構



図3.1 第1層除去後の状況(北から)
白線は調査時点で鎌倉～室町
時代の遺構と思われたもの。



図3.2 SE02井戸枠検出状況(東から)
右の石垣は1段のみを検出している。



図3.3 SE02井戸枠内の竹(西から)
枠外の2本の木は石垣の肩木。

江戸時代以降の遺構には井戸3基、溝、土壙、ピット等があり、調査区の西端は隣地との境を成すコンクリート擁壁の掘方が占める。

調査区北端の井戸(SE01)はコンクリート製の井戸枠を持ち、調査地が駐車場となる以前に建っていた工場に伴うものと思われる。調査区中央から南部に分布する土壙はこの工場の基礎跡である。SE01を切る土壙は工場を撤去する際に廃棄物処理用に掘られたものであろう。なお、工場で使用されたと思われる陶器壺蓋(図3.6)が衛溝掘削中に出土した。

調査区北東端部の井戸(SE02)は大半が調査区外となる。方形の化岩を主体に組まれた石組みの井戸枠を持つ。掘方には東西方向の溝(SD01)に掘れるかのように径約60cmと約80cmの2本の根太を伴う石垣が組まれていたが、その用途などは不明である。掘方からは伊万里や唐津、陶器壺蓋等が出土した。枠の中央には竹が垂直に立つ。SE02は前記の工場を建設する際に埋められたと思われる。

調査区中央から北部の逆T字状の溝(SD02)の埋土は現代耕土層であり、工場が建設される以前の水田区画を示すものと思われる。調査区北西部のピット3基は列をなし、SD02と同方位をとる。調査区の西方にのびる建物の可能性もあるが詳細は不明である。また、調査区北東部に集中する小土壙やピットもSD02と同様に埋土は現代耕土層であった。それらは耕作に伴う抗跡と思われるものもあるが、犬が埋葬された土壙(SK01)もあり、詳細な用途は不明である。

調査区南東端の井戸(SE03)は大半が調査区外となる。井戸枠は確認できなかったが、深さ1.4m以上を

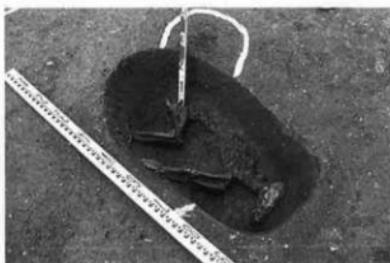


図3.4 SK01犬の埋葬状況(北西から)
埋土からはガラス細片等が出土している。

測るため井戸とした。第I層上面から切り込み、埋土からは土師器焙烙や伊万里等の破片が鎌倉～室町時代の白磁碗や青磁碗、常滑窯の破片とともに出土している(図3.7)。

調査区南西部の最深約18cmを測る溝(SD03)や最大幅30cmを測る小溝(SD04～5)の埋土は第I層に似かよったもので、これらは耕作に伴う遺構と思われる。

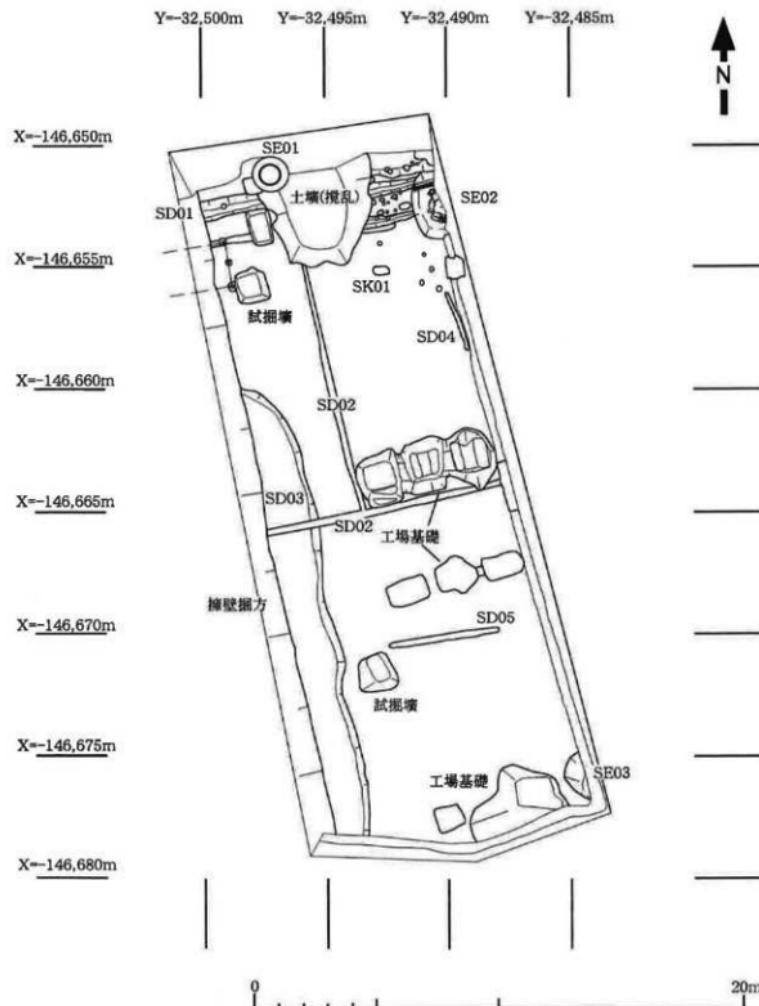


図3.5 江戸時代以降の遺構平面図(S=1:200)

第4章 鎌倉～室町時代の遺構と遺物



図3.6 陶器壺蓋(S=1:4)

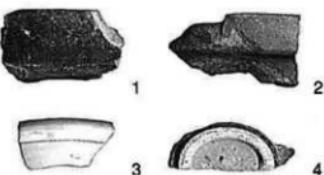


図3.7 SE03出土土器(S=1:2)

1:土師器結縫・2:常滑窯・3:白磁碗
(口径18.0cm)・4:青磁碗(底径5.0cm)



図4.1 鎌倉～室町時代の遺構全景(南西から)

調査区の右に写る建物は植附1次調査地。



図4.2 鎌倉～室町時代の遺構南半部(北から)
箱尺左の水が溜まる穴は試掘場。

鎌倉～室町時代の遺構は井戸3基、溝3条、土壙8基、掘立柱建物16棟、構3列、ピット多数等がある。

SE101

調査区北部の地山上面で検出した。SB112に切れられ、SD106とSB114を切る。平面は東西約210cm、南北約180cmを測る椭円形を呈する。上部の断面は砂時計状を呈し、下部は径約30cmの円形が、ほぼ垂直に落ち込む。検出面から約3.5m下で掘削を中止した。井戸枠は検出されなかったが、上部には存在し抜き取られたと思われる。上部の下位からは口縁を斜め上にして置かれたように完形の土師器皿(図4.7-1)が1点出土し、他には土師器釜片(図4.7-2)と微細な土師器や須恵器が出土した以外に遺物は出土しなかった。最上部からは出土状況の詳細は明らかではないが、完形近くに復元できた土師器皿2点(図4.7-3～4)が出土した。これらの皿は井戸を埋める際に行われた祭祀の痕跡と考えられる。上部からは他に土師器皿片(図4.7-5～13)、土師器釜片(図4.7-14～18)、須恵器壺片(図4.7-19)、須恵器鉢片(図4.7-20～24)、瓦器釜片(図4.7-25～26)、瓦器鍋片(図4.7-27)、瓦器甕片(図4.7-28～29)、瓦器火鉢片(図4.7-30～31)、瓦器碗片(図4.7-32)、青磁碗片(図4.7-33)、白磁碗片(図4.7-34)、陶器鉢片(図4.7-35)、陶器底部片(図4.7-36)、砥石片(図4.7-37)や径約20cm、長さ約100cmを測る切断された自然木等が出土した。遺物の種類と破片数は表4.2に示している(P.27)。瓦器甕にはSD104と同固体と思われるものがあり、SE101はSD104と同時に埋められたものと考えられる。

SE102

調査区南端の地山上面で検出した。一部は調査区外となる。SE103を切り、SB127と重複する。平面は長辺約180cm、短辺約120cmを測る隅丸長方形を呈する。検出面から約2.6m下で掘削を中止した。検出面から約80cm下で口縁を横にした完形の瓦器碗2点(図4.11-1)と土師器釜片(図4.11-2)が出土し、これらの約40cm下で口縁を上に3点を重ねた土師器皿(図4.11-3)が、さらに約100cm下で漆椀の底部(図4.11-4)が上向きに出土した。これらの碗や皿は井戸を埋め

る際に行われた祭祀の痕跡と考えられる。瓦器碗2点と土師器皿は同形態、同法量のためそれぞれ1点のみを図示している。他に下部からは土師器皿片(図4.11-5~6)、瓦器皿片(図4.11-7)、瓦器碗片(図4.11-8)、須恵器鉢片(図4.11-9~10)、曲物底板片(図4.11-11~12)等が出土し、最上部から瓦器皿片(図4.11-13)等が出土した。遺物の種類と破片数は表4.1に示している(P.26)。井戸枠は検出されなかったが、土師器

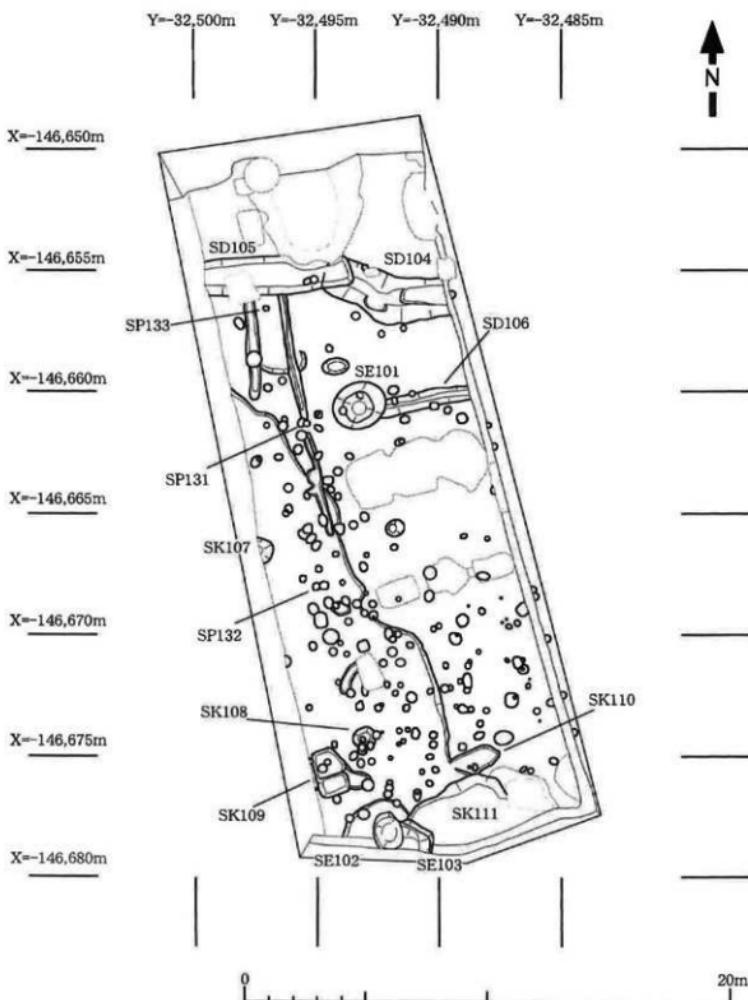


図4.3 錦倉～室町時代遺構平面図(S=1:200)



釜片の口縁部がほぼ完全に復元されたことから、木製の井戸枠に土師器釜を積み上げていたと想像される。なお、調査時には次に述べるSE103とともに検出面から約2.2mまで一つの井戸として誤って掘削している。

SE103

調査区南端の地山上面で検出した。一部は調査区外となり、SE102に切られる。平面は一辺約190cmを測る隅丸方形を呈すると思われる。検出面から約2.6m下で掘削を中止した。井戸枠は検出されなかつた。調査時には約2m下まで先に述べたようにSE102とともに検出面から約2.2mまで一つの井戸として誤って掘削している。その際に瓦器碗(図4.11-14～15)や須恵器鉢片(図4.11-16)等が出土した。遺物の種類と破片数は表4.1に示している(P.26)。SE102とは異なる井戸と判断した後の下位からは瓦器碗片(図4.11-17)や土師器皿片(図4.11-19)馬齒(図



図4.4(上) 鎌倉～室町時代の遺構全景(北から)

手前の溝はSD104とSD105。白線が1条の溝のように引かれている。

図4.5(左) 鎌倉～室町時代の遺構北半部(南から)

大きな円形の穴はSE101。

穴に切られる溝はSD106。

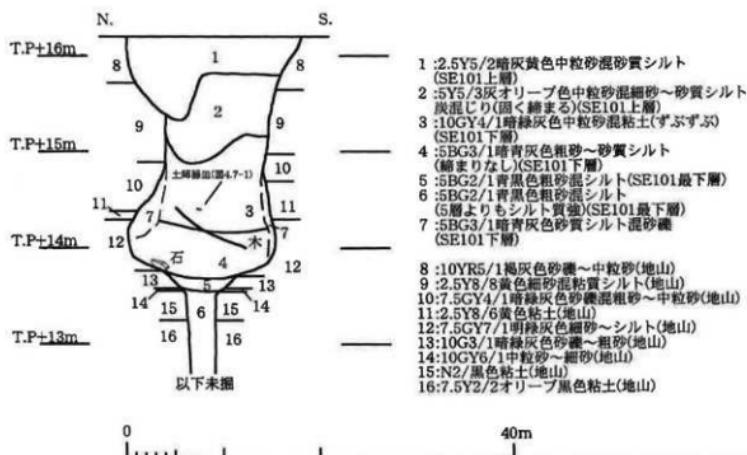


図4.6 SE101断面図(S:1:50)

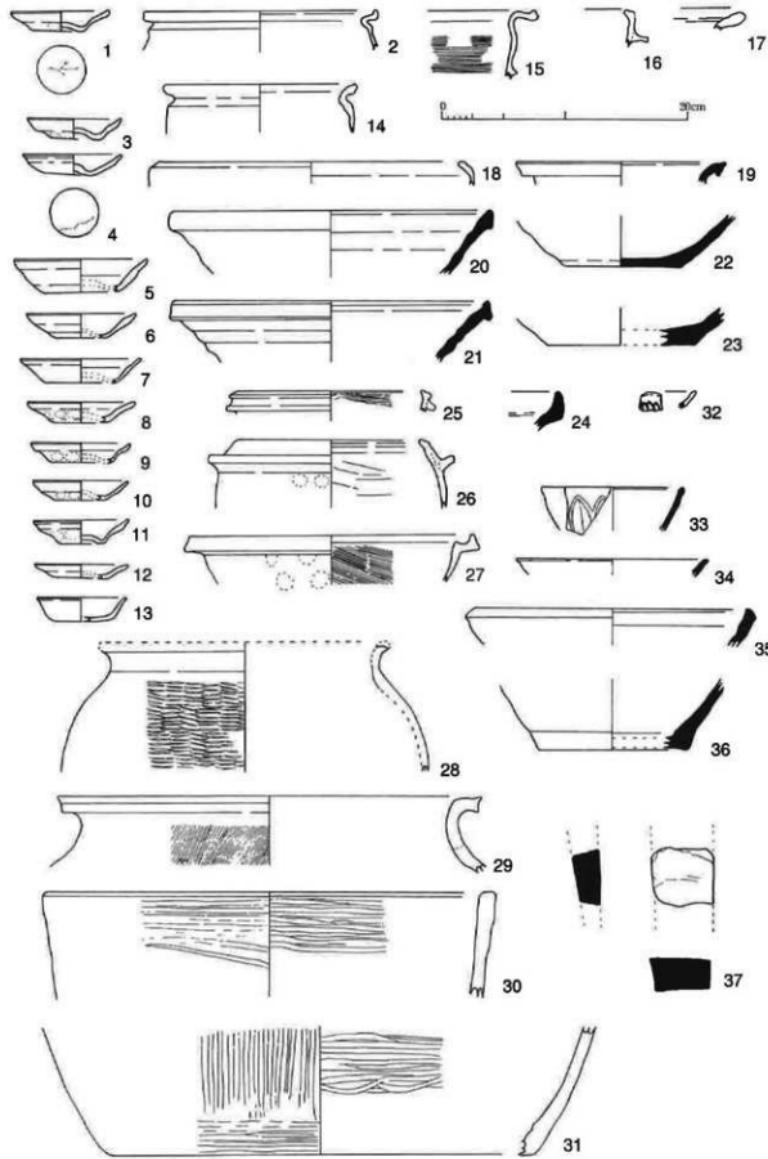


図4.7 SE101出土遺物(S=1:4)

1~18:土師器、19~24:須惠器、25~32:瓦器、33~34:磁器、35~36:陶器、37:砖石

4.12)等が出土した。

SD104

調査区北東部の地山上面で検出した。SD105とSB112に切られる。東西方向で幅約150cm、最深約64cmを測り、長さ約5mを検出した。西へ向かって深くなる。西端を検出し、東は調査区外へ続く。埋土は上下に分けられるが、出土遺物に時間差はない。検出面から約20cm下の北肩で完形の口縁を斜め上に向けた土師器皿が1点(図4.15-1)出土した他、土師器皿片(図4.15-2~6)、瓦器火鉢片(図4.15-7)、瓦器甕、土錐(図4.15-8)、石硯(図4.15-9)、砥石片(図4.15-10)等が出土した。遺物の種類と破片数は表4.2に示して



図4.8 SE102土器出土状況(北から)

瓦器碗は図4.11-1、土師器釜は図4.11.2。



図4.9 SE102漆碗出土状況(北から)

図4.11-4

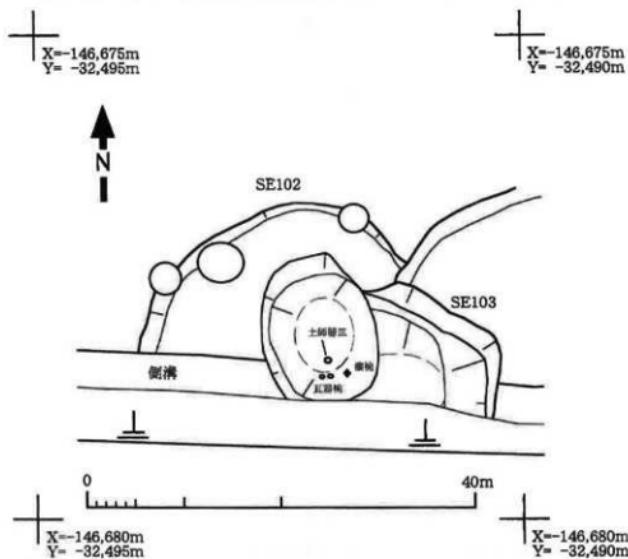


図4.10 SE102・SE103平面図(S=1:50)

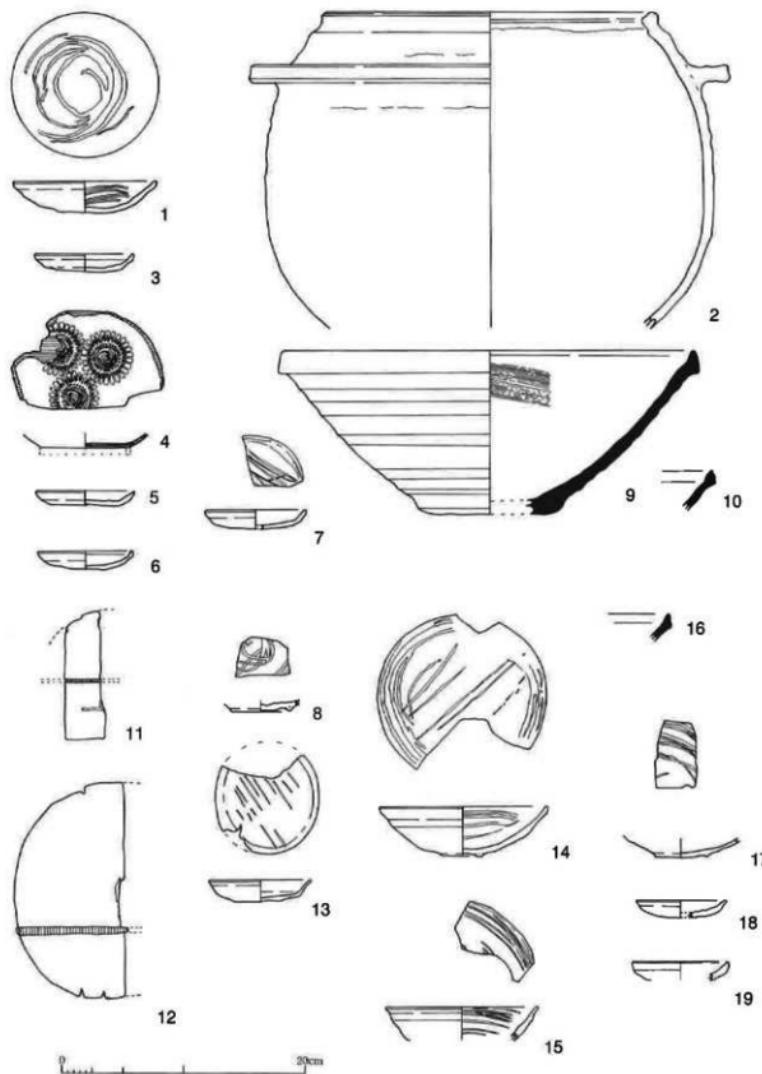


図4.11 SE102・SE103出土土器(S-1:4)

1~12:SE102、13:SE102最上層、14~16:SE103(誤掘削部)、17~19:SE103



図4.12 SE103出土馬齒
(S=1:1)

いる(P.27)。瓦器甕にはSE101と同固体と思われるものがあり、SE101はSD104と同時に埋められたものと考えられる。

SD105

調査区北東部の地山上面で検出した。SD104を切り、SB112に切られる。東西方向で幅約160cm、最深約40cmを測り、長さ約6mを検出した。西へ向かって深くなる。東端を検出し、西は調査区外へ続く。埋土は黒褐色中粒砂混じり砂質シルト層で土師器皿、青磁碗(図4.15-11)、土師器釜(図4.15-12~13)、鉄鎌(図4.14)等が出土した。遺物の種類と破片数は表4.2に示している(P.27)。出土遺物の中にはSD244から出土したものとの同個体と思われるものがあり、遺物の多くは本来、SD104に埋没していたものと思われる。

SD106

調査区北東部の地山上面で検出した。SE101とSB112に切られる。東西方向で幅約70cm、最深約32cmを測り、長さ約3.5mを検出した。西へ向かって深くなる。西端はSE101に切られ、東は調査区外へ続く。埋土は灰黄褐色中粒砂混じり粘質シルト層で、土師器皿(図4.15-14)、土師器釜、瓦器碗(図4.15-15)等が出土した。遺物の種類と破片数は表4.1に示している(P.26)。

SK107

調査区西端の地山上面で検出した。平面形は一辺約80cmを測る隅丸方形を呈すると思われる。深さ40cm以上を測ることから井戸である可能性が高いが、大半は攪乱に切られ詳細は不明である。埋土からは土師器皿(いわゆるヘソ皿)の微細片等が僅かに出土した。

SK108

調査区南西部の地山上面で検出した。平面形は南北約80cm、東西約90cmの楕円形状を呈し、深さ約23cmを測る。SB117、SB118、SB120、SB122、SB125と重複する。埋土からは土師器皿の細片等が出土した。

SK109

調査区南西部の地山上面で検出した。平面形は南北約210cm、東西約220cmの台形状を呈し、最深約20cmを測る。SB117、SB118との重複する。埋土からは土師器皿の細片(図4.15-16~17)や白磁碗(図4.15-18)等が出土した。

SK110

調査区南部の地山上面で検出した。平面形は南北約100cm、東西約200cmの不整形な隅丸長方形を呈

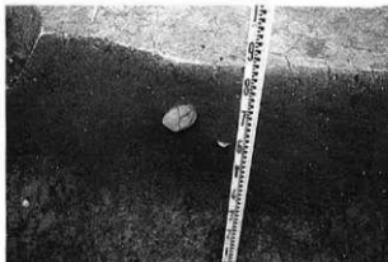


図4.13 SD104土師器皿(図4.15-1)出土状況(南から)



図4.14 SD105出土鉄鎌(S=1:2)

し、最深約20cmを測る。SB121との重複する。埋土から時期を決定できる遺物は出土しなかった。

SK111

調査区南端の第II層上面で検出した。大半は調査区外となり、平面形は南北250cm以上、東西約500cmを測る楕円形を呈するものと思われる。最深約26cmを測る。埋土は褐色中粒砂混じり砂質シルト層で少量の土師器皿(いわゆるへそ皿)の微細片等が出土した。

SB112

調査区北部の地山上面で検出した。SE101とSD104、SD105、SD106を切る。座標北から西へ約10°30'振る方位をとり南北約7.4m(3間)、東西約2.1m(1間)を測る。南北の柱間は約180cmと約280cmを、東西

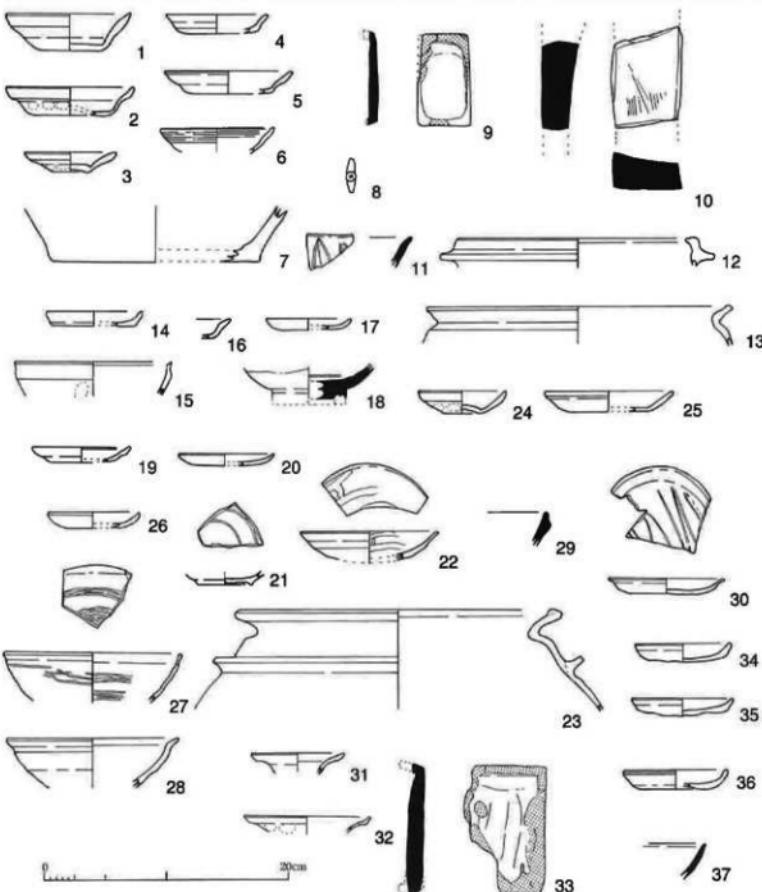


図4.15 溝・土壤・掘立柱建物・ピット出土遺物(S=1:4)

1~10:SD104、11~13:SD105、14~15:SD106、16~18:SK109、19:SB113、20~23:

SB115、24~25:SB116、26~28:SB117、29:SB118、30:SB119、31:SB121、32~33:

SB127、34~35:SP131、36:SP23、37:SP247

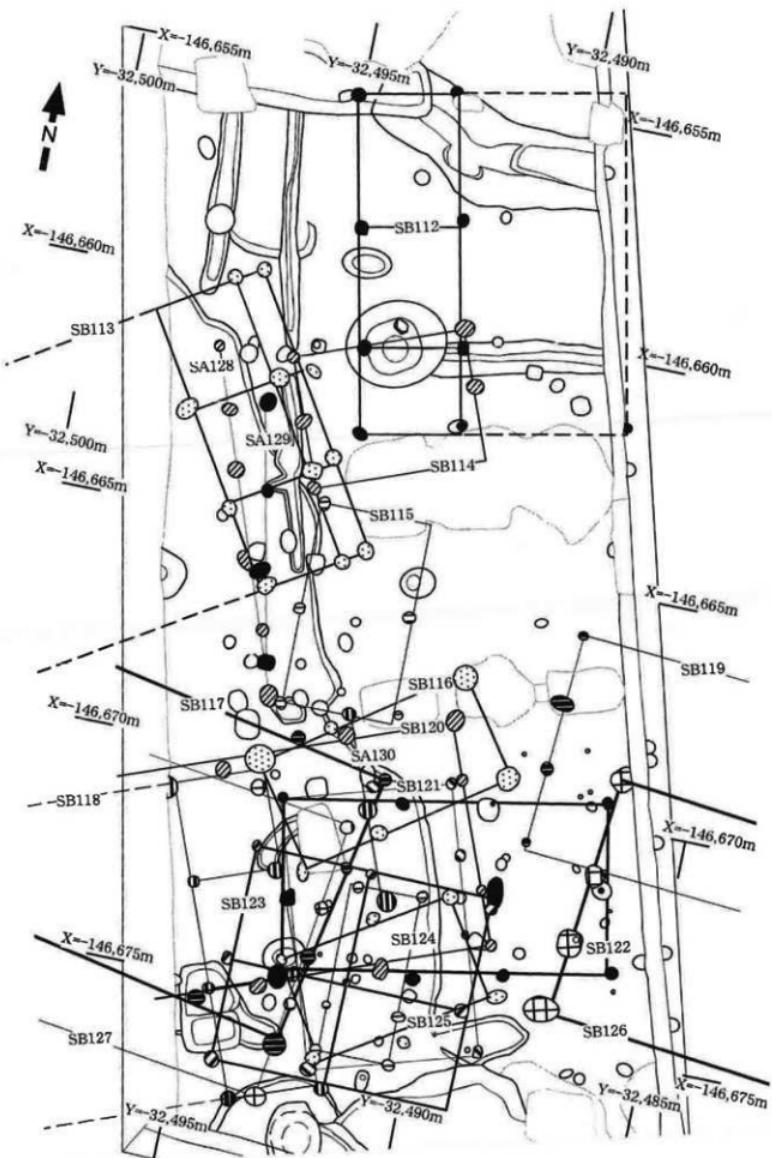


図4.16 堀立柱建物平面図(S=1:100)

の柱間は約210cmを測る。柱穴は最大径約30cmを測る円形や一辺約30cmを測る隅丸方形を呈し、やや不整形である。それらは深いもので約37cmを測る。時期を決定できる遺物は出土しなかった。南辺を東に延長すると東壁に確認されたピットと描うことから、南北約7.4m(3間)、東西約5.6m(3間?)を測る建物である可能性もあるが断定できない。

SB113

調査区北西部の第II層上面で検出した。座標北から西へ約32°振る方位をとり南北約6.6m(3間)、東西約1.8m(1間)を測る。南北の柱間は不揃いで約220cmを、東西の柱間は約180cmを測る。東辺の約50cm東には建物と並行する柱穴が位置し庇が付属したと考えられる。柱穴は最大径約30~40cmを測る円形や南北約30cm、東西約40cmを測る隅丸長方形を呈する等、やや不整形である。それらは深いもので約28cmを測る。南東隅の柱穴からは土師器皿の破片(図4.15-19)が出土した。調査区外へのびる建物である可能性もあるが断定できない。

SB114

調査区中央部の地山上面で検出した。擾乱とSE101に切られ、SPI31を切る。北辺と南辺の柱穴は検出できなかった。座標北から西へ約20°振る方位をとり南北約2.9m(2間)、東西約3.8m(3間)を測る。南北の柱間は約140cmを測り、東西の柱間は不明である。柱穴は径約20~40cmを測る円形を呈し、深いもので約10cmを測る。時期を決定できる遺物は出土しなかった。東西が3間ではなく2間の可能性もある。

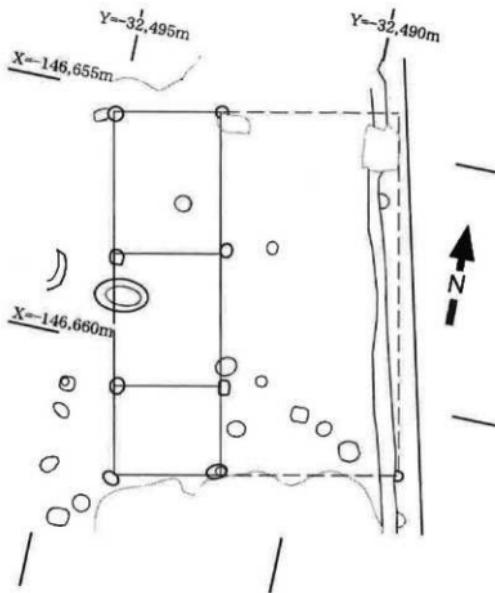


図4.17 SB112平面図(S=1:100)

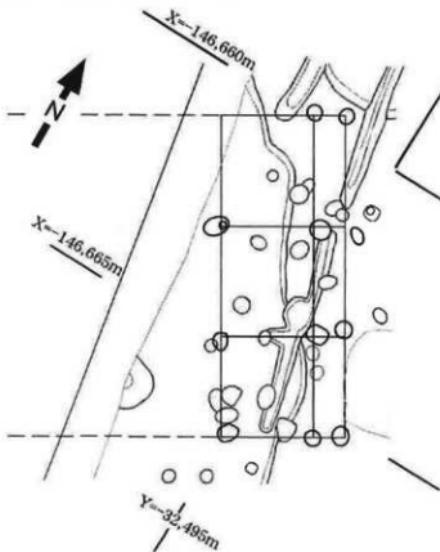


図4.18 SB113平面図(S=1:100)

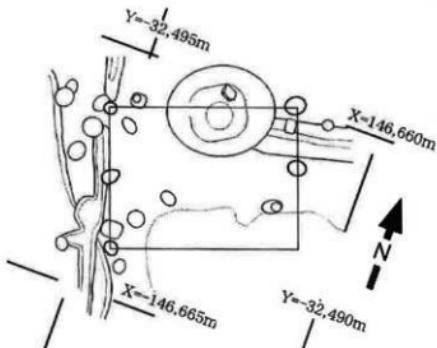


図4.19 SB114平面図(S=1:100)

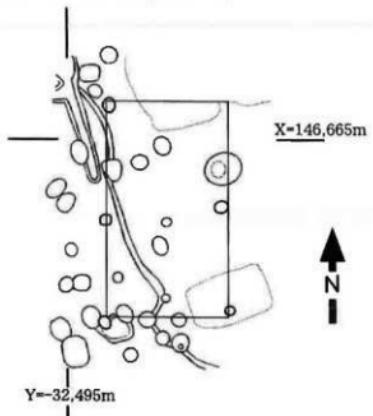


図4.20 SB115平面図(S=1:100)

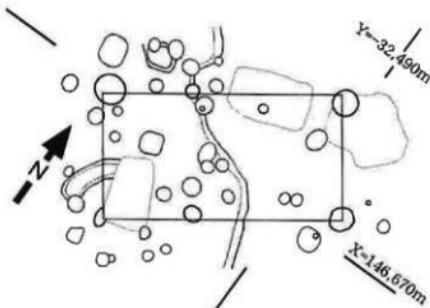


図4.21 SB116平面図(S=1:100)

SB115

調査区中央部の第II層上面で検出した。SA128に切られ、北東隅の柱穴は搅乱に切られる。ほぼ座標に沿う方位をとり南北約4.5m(2間)、東西約4.1m(1間)を測る。南北の柱間は約240cmと約210cmを、東西の柱間は約250cmを測る。柱穴は概ね径約30cmを測る円形を呈し、深いもので約18cmを測る。南西隅の柱穴からは土師器皿(図4.15-20)や瓦器碗(図4.15-21~22)、土師器釜(図4.15-23)の破片等が出土した。東西が1間ではなく2間の可能性もある。

SB116

調査区南部の第II層上面で検出した。座標北から西へ約34°振る方位をとり南北約2.4m(1間)、東西約4.9m(2間)を測る。南北の柱間は約240cmを、東西の柱間は約310cmと約180cmを測る。北西隅の柱穴はSB118と共有する。柱穴は径約30~60cmを測る円形を呈し、深いもので約28cmを測る。北東隅の柱穴からは土師器皿の破片(図4.15-24~25)や瓦器甕等が出土した。この瓦器甕はSE101から出土したものとの同個体かと思われる。

SB117

調査区西南部の第II層上面で検出した。SK108、SK109と重複する。調査区外へのび全体の規模等は不明である。座標北から東へ約11°振る方位をとり南北約6.3m(3間)、東西5m以上(2間以上)を測る。柱間は東西南北とも約210cmを測る。柱穴は概ね径約30~50cmを測る円形を呈し、深いもので約22cmを測る。南東隅の柱穴からは土師器皿(図4.15-26)や瓦器碗(図4.15-27)、灰釉陶器碗(図4.15-28)等の破片が出土した。南北が4間以上の建物あるいは東西が2間の建物である可能性もある。

SB118

調査区南部の第II層上面で検出した。SK108と重複する。座標北から西へ約22°

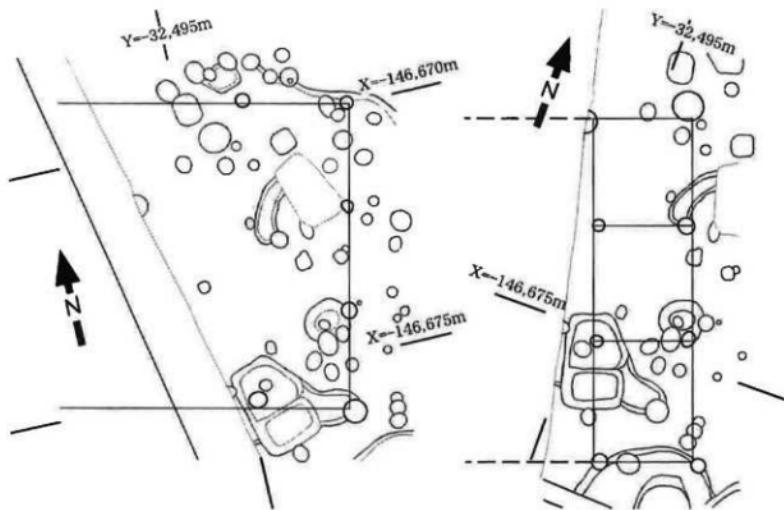


図4.22 SB117平面図(S=1:100)

図4.23 SB118平面図(S=1:100)

振る方位をとり南北約7.2m(3間)、東西約2.0m(1間)を測る。南北の柱間は約240cmを、東西の柱間は約200cmを測る。北東隅の柱穴はSB116と、南東隅の柱穴はSB123と共有する。柱穴は概ね径約30cmを測る円形を呈し、深いもので約18cmを測る。北東隅のSB116と共有する柱穴からは須恵器鉢細片(図4.15-29)等が出土しており、この建物の時期を示すものと思われる。また、調査区西方にのびる建物である可能性もある。

SB119

調査区南東部の地山上面で検出した。SB126を切る。調査区外へのび全体の規模等は不明である。座標北から東へ約3° 30' 振る方位をとり南北約4.8m(3間)、東西5.2m以上(2間以上)を測る。南北の柱間は約160cmを、東西の柱間は約170cmを測る。柱穴は概ね径約20~30cmを測る円形を呈し、深いもので約20cmを測る。西辺の北から2番目の柱穴からは瓦器皿の破片(図4.15-30)等が出土した。

SB120

調査区南部の第II層上面で検出した。SB125を切り、SK108と重複する。座標北から西へ約20° 振る方位をと

図4.24 SB119平面図(S=1:100)

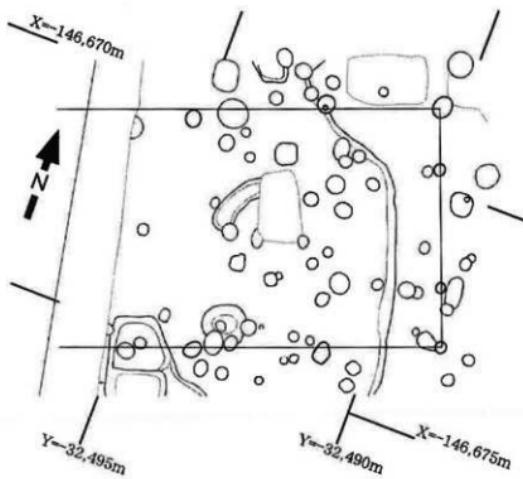


図4.25 SB120平面図(S=1:100)

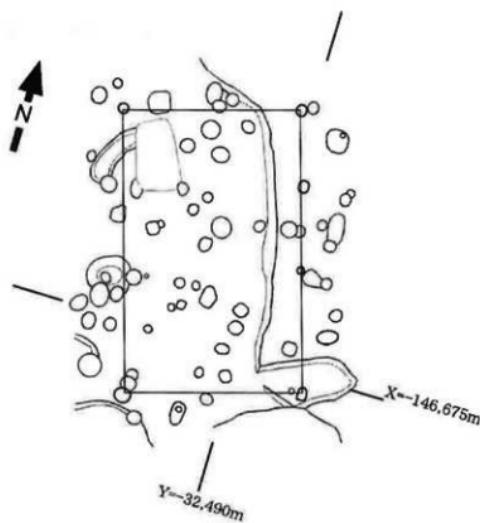


図4.26 SB121平面図(S=1:100)

り南北約5.0m(3間)、東西約6.5m(3間)を測る。南北の柱間は約130cmと240cmを、東西の柱間はばらつきがあり約140cmと約270cmと約210cmを測る。西辺の柱穴は検出できなかった。柱穴は小さいもので径約20を測る円形を呈し、大きいものは長辺約50cmを測る楕円形を呈する。これらは深いもので約25cmを測る。南辺の東から2番目の柱穴からは土師器皿(いわゆるへそ皿)の微細片等が出土した。

SB121

調査区南部の第II層上面で検出した。SB125を切り、SK110と重複する。座標北から西へ約16° 30' 振る方位をとり南北約2.4m(3間)、東西約3.8m(2間)を測る。西辺の柱穴は検出できなかった。北西隅の柱穴はSB122と共に南北の柱穴はSB124と共に南北の柱間はばらつきがあり140cm前後を、東西の柱間もばらつきがあり190cm前後を測る。柱穴は概ね径約20~30cmを測る円形を呈し、深いもので約35cmを測る。南東隅の柱穴からは土師器皿の破片(図4.15-31)等が出土した。

SB122

調査区南部の第II層上面で検出した。SK108と重複し、SB126に切られる。座標北から西へ約10° 30' 振る方位をとり南北約3.8m(2間)、東西約3.8m(3間)を測る。北西隅

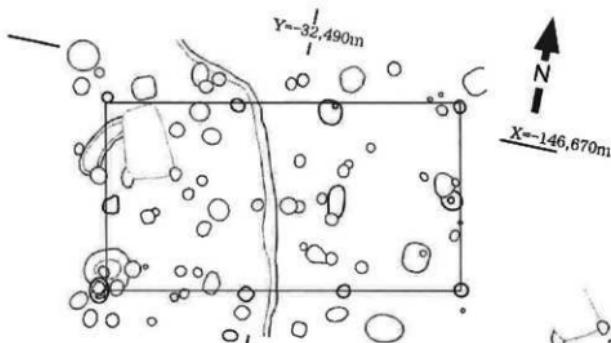


图4.27 SB122平面图(S=1:100)

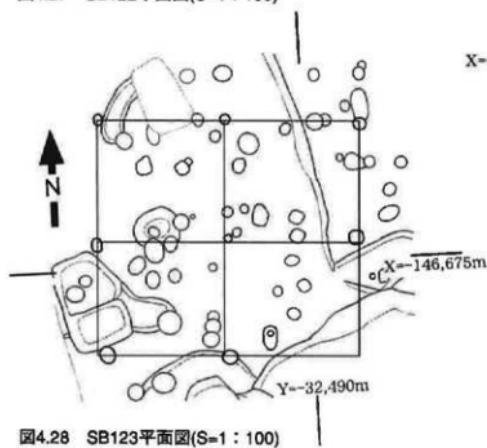


图4.28 SB123平面图(S=1:100)

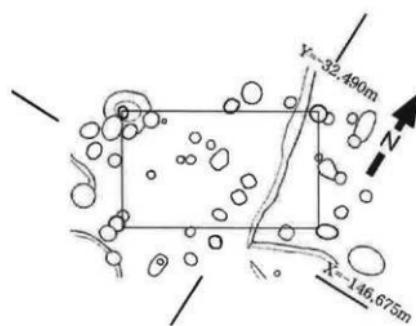


图4.30 SB125平面图(S=1:100)

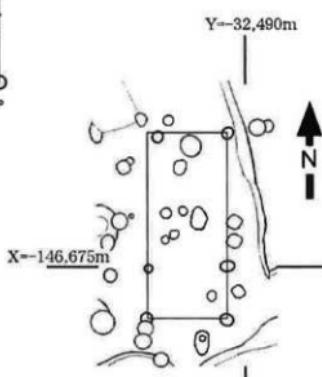


图4.29 SB124平面图(S=1:100)

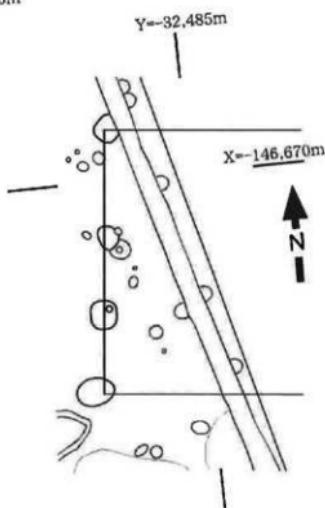


图4.31 SB126平面图(S=1:100)

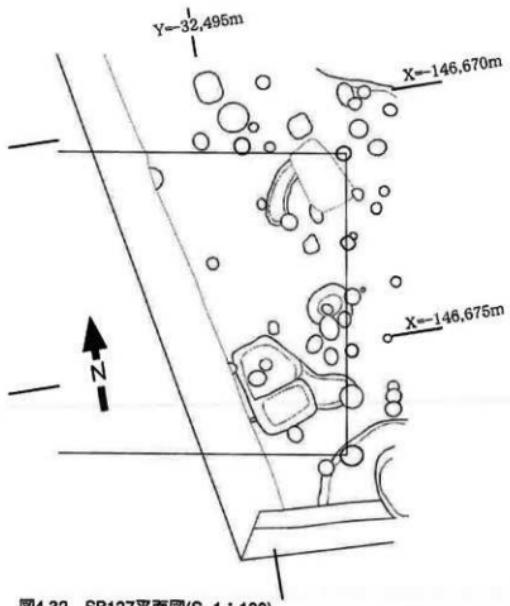


図4.32 SB127平面図(S=1:100)

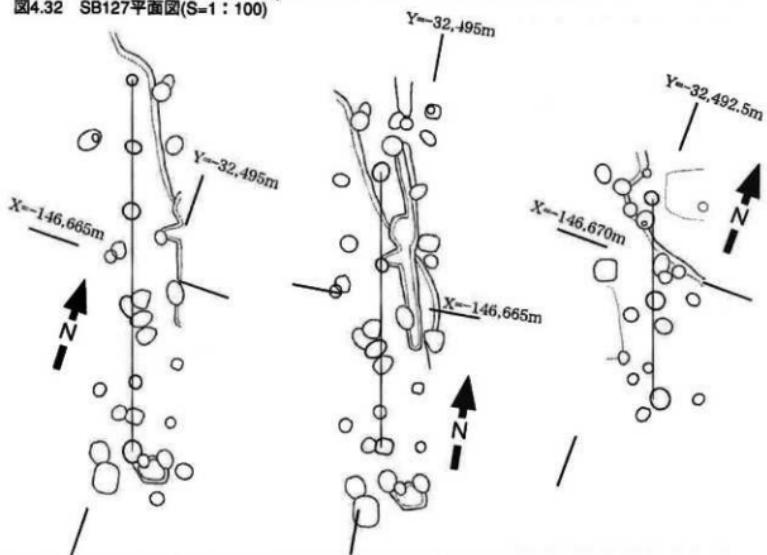


図4.33 SA128・SA129・SA130平面図(S=1:100)

の柱穴はSB121と共に有する。南北の柱間は約190cmを、東西の柱間は約200cmと約250cmを測る。柱穴は概ね径約20~40cmを測る円形を呈し、深いもので約17cmを測る。時期を決定できる遺物は出土しなかった。

SB123

調査区南部の第II層上面で検出した。座標北から東へ約2° 振る方位をとり南北約4.8m(2間)、東西約5.2m(2間)を測る。南北の柱間は約240cmを、東西の柱間は約260cmを測る。建物中央に小柱穴が位置し、総柱状を呈する。南辺中央の柱穴はSB118と共に有する。南東隅の柱穴は検出できなかった。柱穴は径約20~30cmを測る円形や、一辺約30cmを測る隅丸方形を呈する。これらは深いもので約30cmを測る。時期を決定できる遺物は出土しなかった。

SB124

調査区南部の第II層上面で検出した。SB125に切られる。ほぼ座標に沿う方位をとり南北約3.8m(2間)、東西約1.4m(1間)を測る。南北の柱間は約280cmと約100cmを、東西の柱間は約140cmを測る。南東隅の柱穴はSB121と共に有する。柱穴は径約20~30cmを測る円形を呈し、深いもので約12cmを測る。時期を決定できる遺物は出土しなかった。

SB125

調査区南部の第II層上面で検出した。SB120とSB121に切られ、SB124を切る。SK108と重複する。座標北から西へ約32° 振る方位をとり南北約2.4m(2間)、東西約4.1m(2間)を測る。南北の柱間は約120cmを、東西の柱間はばらつきがあり約190~210cmを測る。柱穴は概ね径約20~30cmを測る円形を呈し、深いもので約30cmを測る。

SB126

調査区南東部の地山上面で検出した。SB122を切り、SB119に切られる。調査区外へのび全体の規模等は不明である。座標北から東へ約5° 振る方位をとり南北約5.0m(3間)、東西3m以上(2間以上)を測る。南北の柱間は約220cmと約140cmを測り、東西の柱間は不明である。柱穴は長辺約80cmを測る楕円形や一辺約60cmを測る隅丸方形を呈しばらつきがある。これらは深いもので約10cmを測る。また、南西隅と南

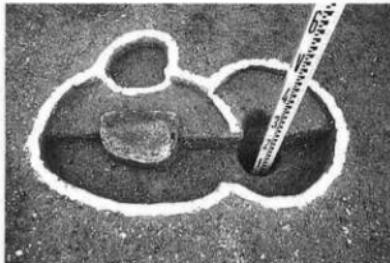


図4.34 SB126石柱穴出土状況(西から)

右の柱穴はSB122の柱穴。箱尺を立てる
小穴が柱痕跡。
上の小穴はSB119の柱穴。

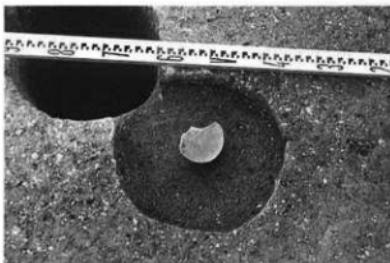


図4.35 SP132土器皿出土状況(西から)

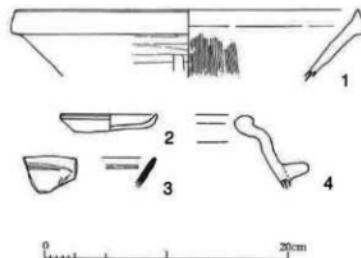


図4.36 第II層出土遺物(S=1:4)

1:瓦器壺・2:土器皿・3:青磁碗・
4:土器釜

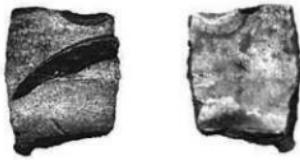


図4.37 第II層出土瀬戸戸水注？(S=1:2)

左:外側・右:内側

	SE102	SE103	SE102・3	SD106	備考
土器小皿	6	9	20	11	*
土師器中皿	1	0	3	0	
瓦器碗大和型	20	11	55	6	
瓦器碗和泉型	4	1	23	0	SE102完形2
瓦器皿	2	0	0	1	
土師器釜河内型	2	0	3	0	
土師器釜大和型	2	3	3	0	
須恵器鉢	1	0	1	0	
瓦器足釜	0	0	5	0	
瓦器甌	3	0	0	1	
常滑？	1	0	1	0	
鹽土	0	0	0	1	
馬齒	1	0	0	0	
須恵器	2	0	1	8	
土師器	1	1	4	7	
弥生土器	0	0	0	6	
黒色土器A	0	0	0	1	
サヌカイト	0	1	0	1	
灰釉陶器	0	0	0	1	

*SE102ほぼ完1、SE102・3完形4

SE102・3とはSE102とSE103を誤って一つの井戸として掘削した部分を指す。

ここに示した数量は破片数であり、大片も微細な破片も1点として数えている。

表4.1 SE102・SE103・SD106遺物一覧

から2番目の柱穴には礎石が据えられていた。時期を決定できる遺物は出土しなかった。

SB127

調査区南西部の第II層上面で検出した。SE102と重複する。調査区外へのび全体の規模等は不明である。座標北から東へ約7° 30' 振る方位をとり南北約6.3m(3間)、東西4m以上(2間以上)を測る。柱間は東西南北とも約210cmを測る。柱穴は概ね径約30～50cmを測る円形を呈し、深いもので約30cmを測る。北辺の東から2番目の柱穴からは土師器皿の破片(図4.15-32)や石硯の破片(図4.15-33)等が出土した。南北が4間以上の建物である可能性もある。

SA128

調査区中央部の第II層上面で検出した。SA129に切られる。座標北から西へ約20' 振る方位をとる南北方向の5間で長さ約7.8m、柱間約140～190cmを測る。柱穴は径約20～40cmを測る円形を呈し、深いもので約30cmを測る。時期を決定できる遺物は出土しなかった。

SA129

調査区中央部の第II層上面で検出した。SA128を切る。座標北から西へ約10° 30' 振る方位をとる南北方向の3間で長さ約5.6m、柱間約180cmを測る。柱穴は最大径約30cmを測る円形や一辺約30cmを測る隅丸方形を呈し、深いもので約26cmを測る。時期を決定できる遺物は出土しなかった。

SA130

調査区南部の第II層上面で検出した。座標北から西へ約22' 振る方位をとる南北方向の2間で長さ約4.2m、柱間約210cmを測る。柱穴は径約30～40cmを測る円形を呈し、深いもので約30cmを測る。時期を決定できる遺物は出土しなかった。

SP131

調査区中西部の地山上面で検出した。SB114に切られる。長辺約40cm、短辺約30cmの不整形な隅丸長方形を呈し深さ約13cmを測る。合子状に重ねたらしい土師器皿が出土したが、

詳細な出土状況は明らかではない。出土した皿は7点がほぼ完形に復元され、3点が約半分の個体に復元された。これらはいずれも同形態、同法量であり、このうち2点を図示した(図4.15-34~35)。他には土師器の微細片が出土したのみで精良な土を使って埋められたものと考えられる。おそらくSP131は地鎮などの祭祀行為の痕跡であろう。

SP132

調査区中央部の地山上面で検出した。径約30cmの円形を呈し深さ約26cmを測る。本来は完形であったと思われる土師器皿1点(図4.15-36)が口縁を上にして出土した。

SP133

調査区北部の地山上面で検出した。一辺約14cmの隅丸方形を呈し深さ約4cmを測る。青磁碗の細片(図4.15-37)等が出土した。

その他の遺構と遺物

調査区北西部の南北方向の溝は最大幅約50cm、最深約25cmを測る。埋土からは土師器皿や土師器釜、瓦器等の微細片が出土した。江戸時代以降の耕作に伴う溝とも思われるが、詳細は不明である。

土壤は先に述べたもの他に3基を検出している。北部の土壤は深さ約30cmを、中央部のものは深さ約15cmを、西部のものは深さ約50cmを測る。

第II層からは土師器皿、土師器釜、須恵器鉢、瓦器碗、瓦器釜、瓦器擂鉢、瓦器甕、白磁碗、瀬戸、弥生土器、羽口等が多量に出土した。これらのうち、一部を図示している(図4.36~37)。瓦器擂鉢(図4.36-1)は今回の調査ではこの1点が出土したのみである。上層から混入した可能性がある。土師器皿(図4.36-2)は本来、完形であったと思われる。青磁碗細片(図4.36-3)は釉が乳白色を呈する。土師器釜(図4.36-4)は第II層上面を精査中に出土した。瀬戸(図4.37)は底部付近の細片である。注口か把手の基部が僅かに遺存し、水注と思われる。

また、前章で述べたSE03からは白磁碗や青磁碗、常滑甕等が出土している(図3.7)。

	SE101	SE101	SD104	SD105	備考
	上層	下層			
土師器小皿	195	3	115	11	*
土師器中皿	3	1	6	2	**
土師器皿細片	35	0	17	0	
白磁碗	1	0	0	0	
青磁碗	2	0	1	1	
土師器釜	94	2	25	14	
須恵器鉢	32	1	6	2	
須恵器甕	1	0	1	1	
瓦器三足釜	20	0	7	7	
瓦器鍋	1	0	0	2	
瓦器甕	22	0	9	0	
瓦器火舎	11	0	2	1	
常滑	15	0	14	0	
砥石	2	0	1	0	
礫土	9	0	6	2	
鉄	1	0	1	3	鉄錆1
土錠	0	0	1	0	土錠質
石硯	0	0	1	0	
骨	0	0	1	0	
土師器小皿	35	0	18	4	
瓦器甕	167	2	75	23	
瓦器皿	2	0	2	0	
土師器釜	10	0	8	1	
須恵器	12	1	17	5	
土師器	35	1	33	3	
弥生	3	0	97	6	
黒色土器A	0	0	1	0	
布目瓦	2	0	0	0	

*SE101上層ほぼ完形2、SE101下層完形1

**SD104完形1

ここに示した数量は破片数であり、大片も微細な破片も1点として数えている。

表4.2 SE101・SD104・SD105遺物一覧



図5.1 弥生時代落ち込み全景(北から)
白線は落ち込み上端。中央の窪みは室町
時代の溝SD104。

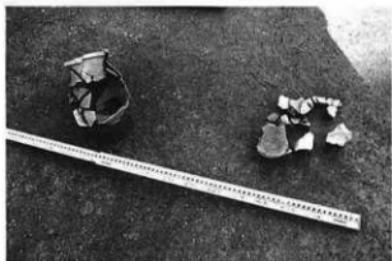


図5.2 落ち込み内土器出土状況(北東から)
左は弥生土器壺(図5.6-1)、右は土器群
A。



図5.3 落ち込み土器出土状況(北東から)
左は土器群A、右は弥生土器壺(図5.6-
1)。

第5章 弥生時代の遺構と遺物

検出した弥生時代の遺構は落ち込み1基、土壙2基、ピット2基と少ない。落ち込み以外の埋土は鎌倉～室町時代の遺構と同様であり、埋土から時期を推定できず、弥生土器のみが出土したものを弥生時代の遺構とした。

落ち込み

調査区北部の地山上面で検出した。最大幅約740cm、最深約40cmを測り、東西方向の溝状を呈する。西部は北へ曲がるようであるが断定できない。調査区外にのび、東方は植附遺跡第1次発掘調査で統一が検出されている。北東部からは口縁部から底部まで復元できた弥生土器壺(図5.6-1)が出土した。その南に少量の土器が集中して出土し(土器群A)、さらに南の落ち込み最深部に多くの土器や石包丁、サヌカイト片が集中して出土した(土器群B)。これらの土器は落ち込みの底より約14～19cm上に集中していた。いずれも土器の摩耗は著しい。土器群Aのうち圓化し得たものは弥生土器底部片(図5.6-7)のみである。土器群Bから出土した弥生土器壺片には口縁部内面に円形浮文を貼り付けるもの(図5.6-2)や焼成前に口縁部に孔を穿つもの(図5.6-3)がある。また、弥生土器壺片(図5.6-9)にも孔を穿つものがある。図5.6-10は室町時代の溝SD104から出土したが本来は土器群Bに含まれていたと思われる。これらのほかに弥生土器や若干のサヌカイト片が出土している。攪乱



図5.4 落ち込み内土器群B出土状況(北西から)
右の落ちは室町時代の溝SD104。

より東方、室町時代の溝SD104より北方からの出土が多い(図5.6-12~17)。なお、北西部の搅乱に接する部分からは須恵器甕の細片が1点出土した。このことから、本遺構が弥生時代以降に属する可能性があるが、出土状況の詳細が不明なため、その須恵器は混入したものとした。

SK201

調査区中西部の地山上面で検出した。搅乱に切られ、全体の規模や形状は不明である。おそらく南北

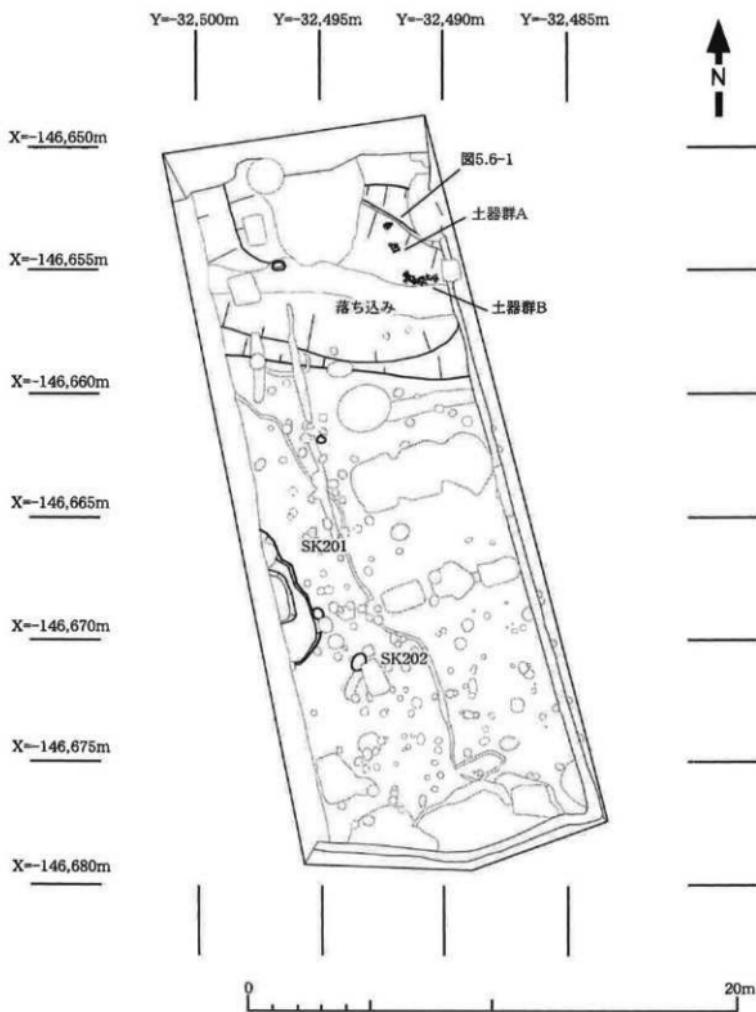


図5.5 弥生時代遺構平面図(S=1:200)

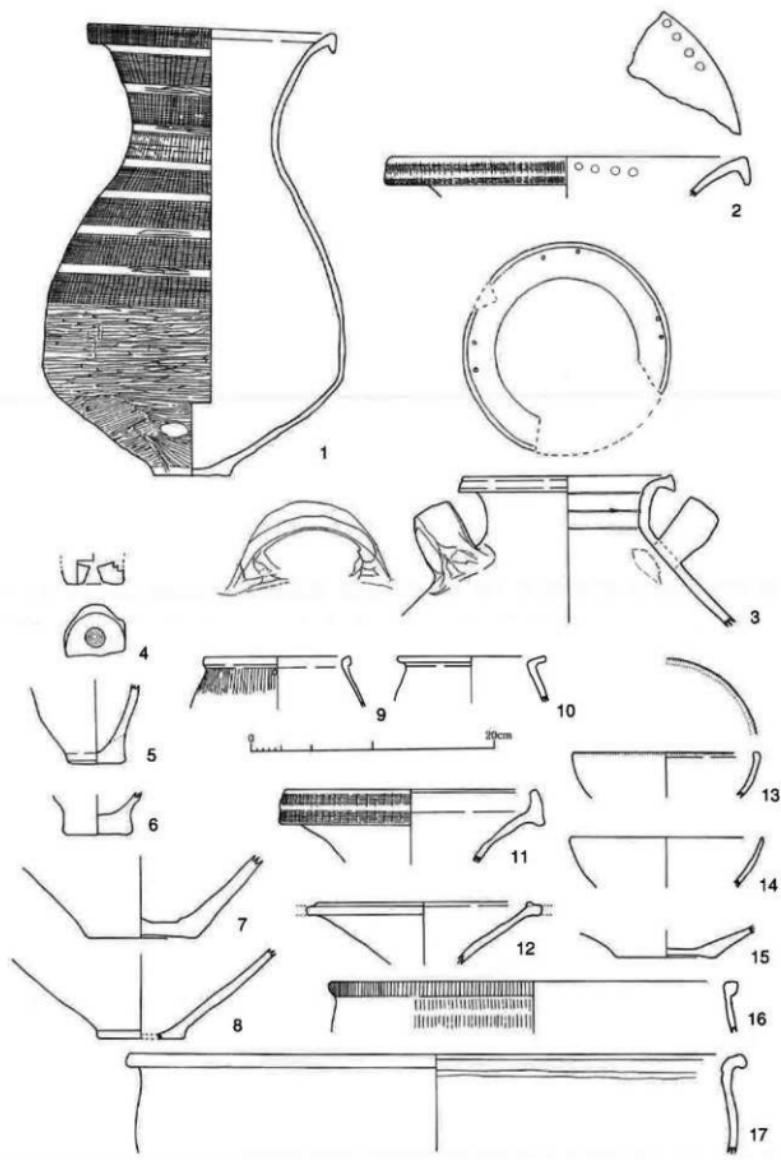


図5.6 弥生時代落ち込み出土遺物(S=1:4)

30 2~6・8~9:土器群B、7:土器群A、10:SD104、11:北西部、12~17:北東部



図5.7 落ち込み出土石包丁片(S=1:1)



図5.8 SK201出土石鏃(S=1:1)

端部欠損。重量約2.4g。

約300cm、東西約150cmの不整形な楕円形状を呈するものと思われる。深さ25cm以上を測る。埋土からは石鏃(図5.8)や弥生土器片(図5.10-1)等が出土した。

SK202

調査区南西部の地山上面で検出した。試掘場に切られる。長辺約70cm、短辺約50cmの楕円形状を呈し、深さ約10cmを測る。埋土からは遺構の規模に比して多くの弥生土器が出土した。土器は2個体前後の弥生土器の口縁部から底部にかけての破片と思われるが、摩耗が著しく詳細は不明である。図示した壺(図5.10-2)も摩耗が著しく、口縁部以下を復元することができなかつた。

その他の遺構と遺物

2基のピットからは弥生土器の細片の他に遺物は出土しなかつた。

また、後世の遺構に混じって弥生土器が出土している。図示した壺(図5.10-3)は鎌倉～室町時代のピットから、弥生土器壺(図5.10-4)は室町時代の井戸SE101から出土したものである。壺の口縁部には焼成前に穿った孔がある。

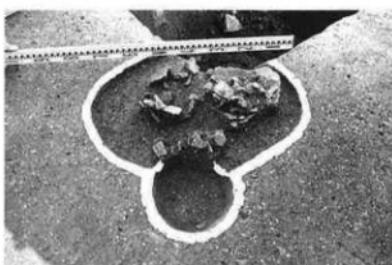


図5.9 SK202土器出土状況(北西から)

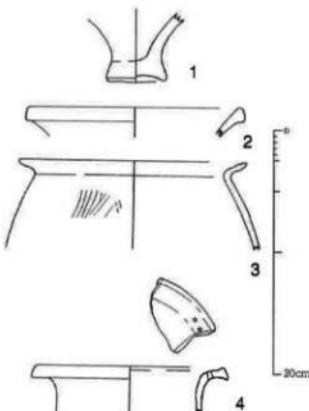


図5.10 SK201・SK202等出土土器(S=1:4)

1:SK201・2:SK202・3～4:後世の遺構

第6章 まとめ

今回の発掘調査で明かとなった点を時期ごとに列記してまとめとしたい。

弥生時代の遺構を検出した。出土した土器は弥生時代中期後半のものである。調査地に当時の集落が

存在したと思われるが、その詳細は不明である。なお、後世に削平されたために検出された遺構が少ないと考えられる。

鎌倉～室町時代の遺構を検出した。遺構には井戸や建物等があり、調査地に当時の集落が存在したことが明かとなった。これらの遺構の方位や重複関係、出土遺物等から、その変遷を想定し図6.1～2に示した。おおまかにI期は13世紀後半頃、II期は13世紀末頃、III期は14世紀前半頃、IV期は14世紀中～後半頃、V期は14世紀後半頃、VI期は15世紀前半頃かと思われる。今回の調査では集落は13世紀後半に出現し、15世紀前半頃まで継続している。各時期の遺構配置や方位には変化が認められ、特にII期とIII期、III期とIV期、V期とVI期の間には大きな変化がある。これらの大きな変化は建物の立て替え等に起因するものではなく、集落形態ひいては集落構造の変化を示すものと考えられる。ここでは紙幅の都合もあり、また、同一の集落が隣接地の調査でも検出されていることから、それらの報告書刊行を待って改めて検討したい。

鎌倉～室町時代の集落が廃絶した後に斜面を擁壁状に造成し平坦面を確保しているが、その詳細な時期は不明である。集落の廃絶後、調査地は放置された状態がしばらく続いたと思われる。

耕作に伴うと思われる小溝を検出したことから調査地が耕作地となっていたことが明かとなった。根拠はないが、耕作地への造成は遅っても江戸時代中頃と思われる。

注

- 1：藤井直正・都出比呂志・河内歴史研究グループ『原始・古代の枚岡』1966 P.34～35
- 2：財團法人東大阪市文化財協会『共同住宅建設に伴う植附遺跡第3次発掘調査概報』1997
- 3：財團法人東大阪市文化財協会『植附遺跡第5次発掘調査報告書』1999
- 4：財團法人東大阪文化財協会『西ノ辻遺跡第10次発掘調査現地説明会資料』現在報告書作成中

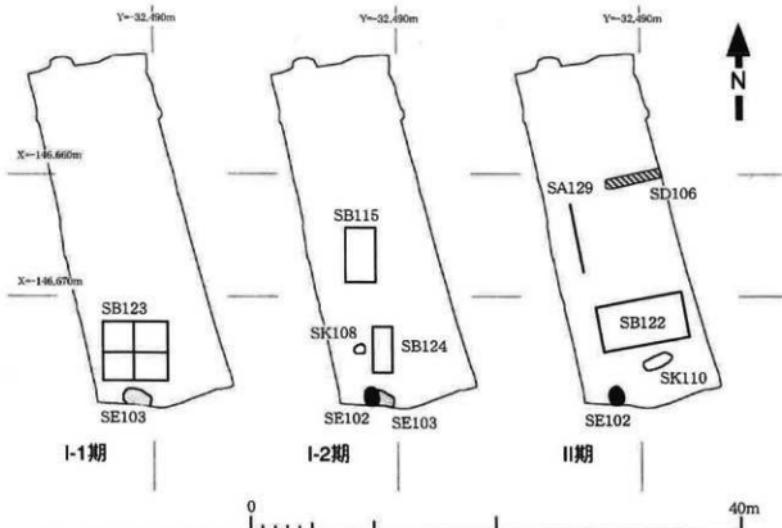


図6.1 鎌倉～室町時代主要遺構変遷想定図(S = 1 : 400)

5: 財団法人東大阪市文化財協会『植附遺跡第1次発掘調査報告書』2002

6: 「VI植附遺跡第2次発掘調査報告書」財団法人東大阪市文化財協会「東大阪市文化財協会概報集-1996年度(1)-」

1997

7: 「地山」という言葉に「不適切である」との指摘があるが、今回は層序の検討が不十分なため便宜的に使用した。

「第2章神並遺跡南西端の中世堤状遺構とその後の耕作地跡-共同住宅建設に伴う神並遺跡第9次発掘調査報告-」財団法人東大阪市文化財協会『神並遺跡発掘調査報告集-第9・10・18・19・22次調査-』2000 P.10

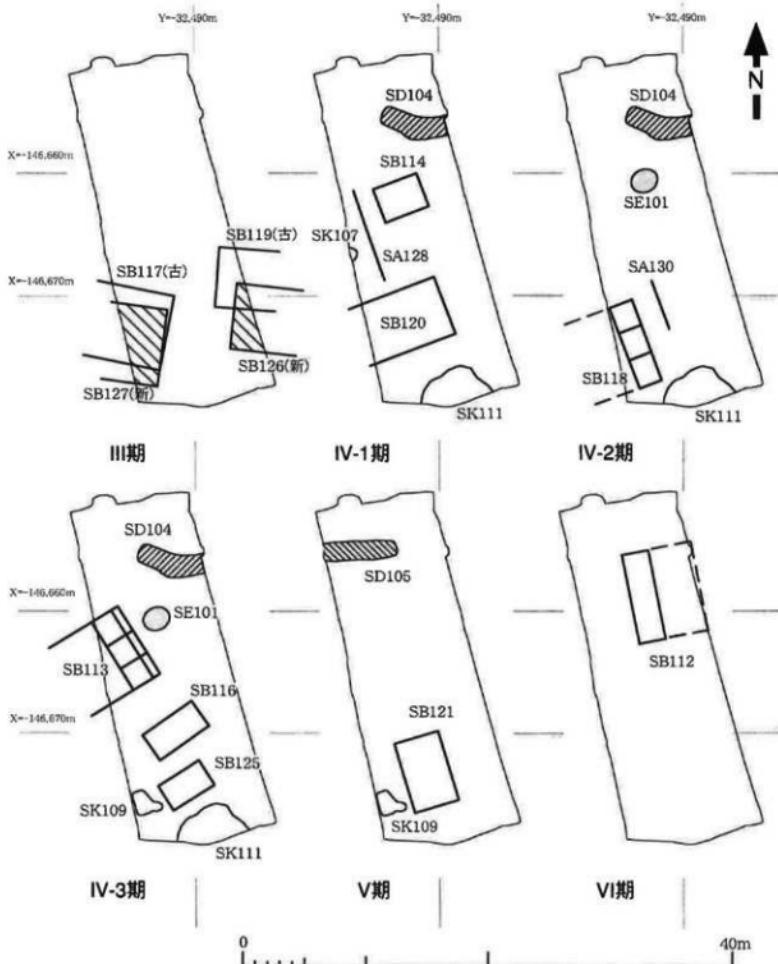


図6.2 鎌倉～室町時代主要遺構変遷想定図2 (S=1:400)

報告書抄録

ふりがな うえつけいせきだい 11 じはっくつちょうさほうこく
書名 植附遺跡第11次発掘調査報告
副書名
巻次
シリーズ名
シリーズ番号
編著者名 金村浩一
編集機関 財団法人東大阪市文化財協会
発行機関 財団法人東大阪市文化財協会
作成法人ID 42710
郵便番号 577-0843
電話番号 06-6736-0346
住所 大阪府東大阪市荒川3丁目28-21
発行年月日 2002.03.31
ふりがな うえつけいせき
遺跡名 植附遺跡
ふりがな おおさかふひがしおおさかしにしいしきりちょう 1 ちょうめ
遺跡所在地 大阪府東大阪市西石切町1丁目69-1・2
コード 市町村 27227 遺跡番号 39
北緯 34° 40' 38" (旧測地系)
東経 135° 38' 43" (旧測地系)
調査期間 1996.10.09 ~ 11.28
調査面積 約306 m²
調査原因 共同住宅建設
種別 集落
主な時代 弥生 / 中世
遺跡概要 弥生 - ピット + 土壙 + 落込み - 弥生土器 + 石器 + 石包丁 / 中世 - 掘立柱建物 + 井戸 + 土壙 + 溝 - 土師器 + 瓦器 + 須恵器 + 陶器 + 鉢器 + 土鍬 + 石鏡
特記事項 特記なし

植附遺跡第11次発掘調査報告

2002年3月31日

発行 財団法人東大阪市文化財協会

〒577-0843 大阪府東大阪市荒川3丁目28-21 TEL.06-6736-0346

印刷 ㈱近畿印刷センター

〒582-0001 大阪府柏原市本郷5丁目6番25号 TEL.0729-72-5918

紙質 表紙 OKサンドカラー 170Kg 本文 マットコート 57.5Kg

製本 無線綴じ

The 11th Excavation Report of Uetsuke Site,
Higashi-osaka City, Osaka Pref., Japan.

March 2002

Higashi-osaka City Cultural Heritage Association